

早稲田大学 社会科学部 古典 講評

〔総合分析〕

出題形式	マーク式
試験時間	国語 60 分
特徴・その他	1999 年までは現古融合問題であったが、これで 4 年連続古文単独の出題となった。本文が長く、空欄補充問題が多いのも、この学部の例年の傾向である。

〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
(二)	『花鏡』(批判ノ事) 『至花道』(皮・肉・骨の事) ともに世阿弥の能楽論	問十一 完了の助動詞「たり」と「り」の接続の知識を問う文法問題。	標準
		問十二 直前の「さびさびとしたる内に…あり」を押さえれば、正解を選ぶのは容易。	やや易
		問十三 傍線部の説明問題だが、注を読めば紛れはない。	やや易
		問十四 本文中に直接説明している箇所はなく、消去法で解くことになる。	標準
		問十五 比喻を押さえる空欄補充問題。「心」＝「骨」の関係に気が付くことが出来れば解ける。	標準
		問十六 選択肢に「音」と「唱」が含まれることによって非常に紛らわしくなっている。	難
		問十七 「に」の識別問題だが、意味のチェックが必要。a の「に」が、「音曲ばかりの内 <u>に</u> も、この三つはあるべし。」の「に」と同じことに気が付けばよい。	やや難
		問十八 内容合致問題。本文は決して易しくないが、選択肢に紛らわしいものはない。	標準

〔総合コメント〕

受験生にとってはなじみの薄い能楽論であり、本文も長く特殊な用語も多いため、難解に思われたのではないだろうか。しかし、本文が難しいことと、設問の難易度は別。この学部は、基本的な問題から難問まで、様々な難易度の設問を含めて出題してくる。基本問題は決して落とさないように、難問に時間を使い過ぎないように注意して取り組み、合格点を取るのには難しくない。